明石の史跡（２６）疣おとしの薬師

享保の初めごろ、明石中町に住む大屋某なるものが、幼少のころより、全身に疣（いぼ＝皮膚上に突起した角質の小さな塊。原因の多くはウイルスで、伝染の可能性がある＝広辞苑）ができ、鮫皮の様相を呈したという、気の毒な状況にあった。そこで名医をたずねたり、あらゆる方法でもって、治癒をはかったけれども、効果はなく、万策つきた。そこで最後の頼みの綱として、仏にすがることとなる。

中町というのは現在の本町二丁目（東は本町一丁目・南は材木町・西は樽屋町・北は国道２号線をはさんで大明石一丁目）にあたり、元和４年（１６１８）の築城時に成立した、明石惣町１０町の１つで、当初は信濃町を称する。しかし４代藩主大久保季任の在任中に、中町と改称。町の規模は、享保６年（１７２１）の改めによれば、家数３６軒（本家２０・借家１６）で１６８人を数える（兵庫県の地名Ⅱ）。

延宝６年（１６７８）、明石惣町１０町の大年寄が２名設置された。そのうちの１人が大屋佐太郎で、おそらく疣に苦しめられた大家某なる者は、佐太郎本人か、その同族のだれかではなかろうか。

町内には開業医としての野口立伯が知られているものの、大家某が頼りにしたものは、材木町に所在する龍王山長林寺（天台宗太山寺末寺）の本尊薬師如来（明石七仏薬師の１つ）であった。当時この薬師さんの霊応（霊験＝神仏などの通力にあらわれる不思議な験＝広辞苑）には見るべきものがあったらしく、参詣して身の不運を薬師さんに聞いてもらうために、夜通し御堂にこもって懸命に祈ったという。その効果はすばらしく、跡形もなく治癒したと今日に伝わる（播州寺院異物語１／播陽万宝智恵袋下．９３４頁）。

日本歴史学会会員 茨木 一成